

国語教科書に現れる親族呼称の変遷

田村 貴 広

1. 初めに

本稿では筑波大学付属図書館に所蔵されている明治期から現代にかけての教科書に現れる親族呼称の変遷についてごく一部ではあるが記述する。調査した資料は以下の通りである。

- A. 田中義廉 編 『小學讀本』
全4巻：巻1－4のいずれも明治7（1874）年
- B. 文部省 編 『讀書入門』
全1巻：明治19（1886）年
- C. 文部省 編 『尋常小學讀本』
全7巻：巻1－7のいずれも明治20（1887）年
- D. 學海指針社 編 『帝國讀本』 修正再版
全8巻：巻1－8のいずれも明治26（1893）年
- E. 坪内雄藏 『讀本 尋常小學生徒用書』
全8巻：巻1－8のいずれも明治32（1899）年

- α. 『尋常小學讀本』（イエスシ読本）
全8巻：巻1－7は明治36（1903）年、巻8は明治37（1904）年
- β. 『尋常小學讀本』（ハタタコ読本）
全12巻：巻1・5・6・8・10－12は明治43（1910）年、巻2・4・9は大正2（1913）年、巻3は明治42（1909）年、巻7は大正3（1914）年
- γ. 『尋常小學國語讀本』（ハナハト読本）
全12巻：巻1－4は大正6（1917）年、巻5は大正8（1919）年、巻6・7は大正9（1920）年、巻8・9は大正10（1921）年、巻10・11は大正11（1922）年、巻12は大正12（1923）年
- δ. 『小學國語讀本 尋常科用』（サクラ読本）
全12巻：巻1は昭和7（1932）年、巻2は昭和8（1933）年、巻3・4は昭和9（1934）年、巻5・6は昭和10（1935）年、巻7・8は昭和11（1936）年、巻9・10は昭和12（1937）年、巻11・12は昭和13（1938）年
- ε. 『ヨミカタ』『よみかた』『初等科国語』（アサヒ読本）
いずれも昭和21（1946）年¹：『文部省著作 暫定教科書（国民学校用）』大空社

1984年による

ㇿ. 『こくご』『国語』（みんないいこ読本）

いずれも昭和22（1947）年：『文部省著作 国語教科書』大空社1984年による

イ. 垣内松三 著『しんこくご』『新国語』光村図書

『かざぐるま しんこくご 一ねん上』『友だち しんこくご 二年下』『そよ風
新国語 四年上』は昭和25（1950）年、

『はらっぱ しんこくご 一ねん中』『ごむまり しんこくご 二年中』は昭和
24（1949）年、

『たんぼぼ 新国語 三年上』『みどりの手旗 新国語 三年下』は昭和28（1953）
年、

『まきば 新国語 三年中』『わか草 新国語 六年 上』『地球 新国語 五年
中』は昭和27（1952）年、

その他は昭和26（1951）年

ロ. 石森延男 編『しょうがく しんこくご』『小学 新国語』光村図書

すべて昭和53（1978）年

ハ. 宮地裕 他 編『こくご』『国語』光村図書

すべて平成23（2011）年

Aは自由編纂時代の国語教科書、B-Eは検定制度時代の国語教科書、 α - ζ は国定教科書、 ι - η は新検定制度²（現行の制度）の教科書である。なお、B、C（6・7巻）、Dは筑波大学付属図書館のウェブサイト上で電子化されたデータ³を閲覧・調査した。

2. 父母兄弟の呼称

ここでは、各国語教科書資料に現れた父母兄弟の呼称のうち、いずれの資料でも高い頻度で現れる子から母への、また、逆に親から子への呼称の変遷を追っていく。

2. 1 母の呼称：子→母の呼びかけ

ここでは母の呼称の変遷を見る。口語文による例のうち、地の文・会話文の合計用例数が多いほうから3例を取り上げる。ただし3番目に多い例が複数ある場合は、登場の最も早いものから示す。

I. A—E

資料：出版年	A：1874	B：1886	C：1887	D：1893	E：1899
用例：用例数		はゞ：1 ハ、サマ：1	母：7 母様：2 はゞさま：1	はゞさま：2 カ、サマ：1 母：1	はゞ：1 母さま：1

Aは全て文語文で構成されている資料であるため、口語文の例は存在しない。B以降の用例を見ると、母（はは）のほかに「はゞさま」という例が目立つ。后者は会話文で子から母への呼びかけに使われた例である。

II. α—ζ

資料：出版年	α：1903, 04	β：1909, 10 1913, 14	γ：1917 1919-23	δ：1932-38	ε：1946	ζ：1947
用例：用例数	母：14 おかあさん：11 オカアサン：10	母：22 オカアサン：9 おつかさん：3	おかあさん：18 オカアサン：13 母：2	おかあさん：45 母：15 オカアサン：15	おかあさん：65 オカアサン：15 母親：6	おかあさん：110 母：6 母親：4

α—ζすなわち国定教科書に至って初めて「おかあさん」という語が現れる。「ははさま」と取って代わる形で現れたこの語はA—Dとの断絶を示している（後述）。また、用例数はさほど多くないものの、ε以降は「母親」という語形も見られる。用例数は時代が下るごとに増えていく傾向がある。

III. イ—ハ

資料：出版年	イ：1949, 50 1951-53	ロ：1978	ハ：2011
用例：用例数	おかあさん：109 母：10 母親：1	おかあさん：40 母：30 お母さん：8	母：8 お母さん：3 おかあさん：2

「おかあさん」という語形は完全に定着していることがうかがえる。α—ζとは逆に時代を下るごとに用例数が減少していく。ロ以降は漢字表記の「お母さん」という例も現れる。

2. 2 子の呼称：父母→子への呼びかけ

ここでは、子への呼称の変遷を見る。2. 1と同様に、口語文による例のうち、地の文・会話文の合計用例数が多いほうから3例を取り上げる。ただし3番目に多い例が複数ある場合は、登場の最も早いものから示す。

I. A—E

資料：出版年	A：1874	B：1886	C：1887	D：1893	E：1899
用例：用例数			おまへ：5 お前：3 子：1	コ：1	おまへ：2 子：1

「おまへ」という例が目立つ。現代では親から子への呼びかけとしては、皆無ではないがおそらくは主流ではない語形である。上の表中には無いがCには1例だけ「名前」＋よ」という形が現れることから、名前で呼ぶこともあったと推測できる。

II. α—ζ

資料：出版年	α：1903, 04	β：1909, 10 1913, 14	γ：1917 1919-23	δ：1932-38	ε：1946	ζ：1947
用例：用例数	おまへ：2 「名前」：1	「名前」＋や：1 むすこ：1 子：1	「名前」：7 娘：4 お前：3	「名前」：9 お前：2 「名前」＋チャ ン：1	おまへ：6 「名前」：5 「名前」＋サ ン：2	「名前」：9 「名前」＋さ ん：6 おまえ：6

「おまへ」「お前」と「名前」が主流となっている。また、「名前」にサンやチャンが付いた例も見られる。「お前」と「名前」の用法の違いについては後述。

III. イ—ハ

資料：出版年	イ：1949, 50 1951-53	ロ：1978	ハ：2011
用例：用例数	「名前」：4 おまえ：3 「名前」＋さん：2	「名前」：1 「名前の一部」＋ちゃん：1	

ロ以降は子への呼びかけの例が極端に減り、ハに至っては全く現れていない。そのために断言はできないが、イからロの間に親から子への呼びかけに「おまえ」を使うことが少なくなった可能性がある。

3. 教科書資料に現れる呼称に関する個別の論点

3. 1 父母の呼称

上記の教科書資料に現れる親族呼称は、地の文における「父」「母」のように、どの資料でも用いられているものもある。しかし、会話文およびそれに準ずる文章⁴におけるものに注目すると、検定制度時代以前と、国定教科書以後にはっきりとした断絶が見られる。

ただし、Aはアメリカの『ウィルソン・リーダー』の翻訳であり、また、全て文語文によって構成されているため、ここでは措いておくことにする。たとえば、Aで

は、会話文であっても兄→妹を「汝」、妹→兄を「吾カ兄」（いずれも巻2：31丁表）と呼んでいる。この例を見ても、当時の児童の生活実態に即しているとは考えにくい。

一方で、B以降は、巻数の若い低学年向けのうちは口語文で書かれており、また、漢字表記も少ないため実際に親族名称がどのように呼ばれていたか、あるいは呼ばれたかかったかが、分かる。实例を見ると、Bの巻1前半部では、「はゝさま（子→母、6丁裏）」という語形が現れるが、ページ数が進むと「母さま（姉→母：妹に対して、27丁裏）」というように漢字で表記されるようになる。このように「母さま」と書かれていたら、現代日本語話者の多くは「かあさま」と読みかねないが、この教科書では仮名表記されていたときの例から「ははさま」と読まれた可能性が高い。

そこで、B—Eおよび α — ζ の各1、2巻の親子・兄弟・姉妹の呼称に注目する。

B—Eにおいては、「とゝさま」「はゝさま」「あにさん」といった語が見られるが、 α — ζ においてはこれらの語は一切現れない。「オトウサン」「オカアサン」「ニイサン」という語に置き換えられている（図1、図2）。特に、B・Cは α — ζ と同じく文部省による編纂である。それにもかかわらず、B・Cから約20年を経た α において親族呼称が全く入れ替わってしまっている。

イーハすなわち国定教科書制が廃止されて新検定制度に変わっても、「おとうさん」「おかあさん」という語は受け継がれ、現代に至っている。

なお、『言海⁵』を引いても「おとうさん」「とうさん」「おかあさん」「かあさん」は載っておらず、一方で「ちち」「とと」「はは」「かか」は立項されている。『言海』は、「とと」は「小児の語」、「かか」は「女子、小児の語」と説明しているため、B—Eにおいて、低学年向けの巻にこれらの語が出現するのは不自然ではない。一方で、『言海』刊行時（1889年）においては「おとうさん」「おかあさん」という語は立項されるほどの影響力が無かったと考えられる。

また、目上の者が目下の者と呼ぶ際の言い方は名前を呼ぶ場合と「おまえ⁶」という語を使う場合に分かれるが、おおむね以下のような区別がある。相手に対する単なる呼びかけ⁷の場合は名前あるいは名前+さんなど接尾辞の付いた形を用い、文の主語あるいは目的語などの文法的な意味を持つ場合には「おまえ」が現れる。以下に例を挙げる。いずれも母から息子への呼びかけである。

「何です。正男さん、大きな聲をして。」（e『初等科國語』一：28上）

「おまへはえらいね。だれに教へてもらったの。」（e『初等科國語』一：28下）

3. 2 国定教科書の特徴

まずは国定教科書の編纂趣意書に注目する。 α の編纂趣意書によると「文章ハ口語ヲ多クシ用語ハ主トシテ東京ノ中流社會ニ行ハルルモノヲ取ツテ、國語ノ標準ヲ知ラシメ其統一ヲ圖ルコノ⁸ニ努ムルト共ニ出來ウルタケ兒童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りテ談話及綴リ方ノ應用ニ適セシメ（後略）」（帝都教育研究會 編（1932

：5))とあり、標準語教育を強く意識していることがうかがえる。その傾向は次第に強まっていく。

2. 1で述べたように、 α — ζ (国定教科書)においては親族呼称がそれよりも前の教科書と異なる語形になっている。このことは水原(1994：94-107)も指摘している。水原(1994：98)は、「おかあさん」は東京のかなり上流の家庭での、女性や子供による呼び方で、男性はあまり使わない語であったと説明している。

ここで気になるのは、なぜ「おかあさん」という語形が採用されたかである。中村(1948：54)によると、「明治の末年、文部省の國語讀本が「おかあさん」を採用した際も、それに對する上下の非難はかなり高かったと伝えられている」とある。編纂趣意書には「東京ノ中流社會ニ行ハルモノ」「兒童ノ日常使用スル言語」から語を採用したとあるが、この記述からは「おかあさん」がそうであったとは考えにくい。水原(1994：106-107)では、岡倉由三郎の「社会的、政治的に上の者の使うことばが標準語になり、下の者の使うことばが方言になる」という考え方が、東京のごく一部の上流階級の使っていた「おかあさん」を教科書に採り入れる理由となったとしている。

国定教科書は「標準語」のための規範意識が強い。改訂する際に規範に合わない語形を排除しようとしていた形跡さえある。

国立国語研究所(1989：(12))でも指摘されているが、 β に3箇所現れる「おつかさん」を γ では全て「おかあさん」に改めている。 β の「おつかさん」は全て、 β 以降に見られる「水兵の母」という物語に現れる。これは、泣いている水兵を見かけた大尉が水兵をとがめるが、泣いていたのは水兵の母からの手紙に「手柄を立てないのはふがない」と書かれていたため、大尉が今の戦争は個人が功名を立てるものではないとさす話である。

そこで、大尉が水兵の母を呼ぶ際の呼称が問題となる。

β — δ にかけて本文はすべてほぼ同一であるにもかかわらず、 β に見られる「おつかさん」という語が γ 以降では「おかあさん」に変更されている(図3、4)。これは、水兵のリアルに近い話し方を描写するよりも標準語として規範的な語形の方を優先するようになった結果であろう。

その一方で、これも国立国語研究所(1989：(12))が指摘しているとおりに、 β に見られた「オカアサマ(巻4：75)」も γ 以降では削除されている。これは β においても1例しか見られない語であるため、軽率な判断はできないが、規範からはずれる語は丁寧な言い方であっても載せないという、強い規範意識が働いている可能性もありうる。

ところが、 ε に収録されている詩には「とうちゃん(『初等科國語 六：24下)』)という語が登場する。この時代までくると多少はこれまでの規範にはずれる語であっても載せることができるようになったのであろうか。

さらに時代が下り、国定教科書制が廃止されて検定制度となった口には生徒の作文

という形で「母ちゃん（『小学新国語 五年＝上：103』）」という語も現れる。ここま
でくると規範的な語形よりも生徒のリアルな呼び方に近いものを載せるようになって
いると考えられる。

4. 未完遂の調査：長谷川町子『サザエさん』

ここまでは国語教科書のみを見てきたが、本項では国語教科書との比較対象として、
じ・イ・ロとほぼ同時代の漫画作品である長谷川町子『サザエさん⁹』に注目したい。

この作品は

- ・初期においてはじ・イと同時代
- ・サザエさんを中心とした家庭を描いており、家族間の呼称の出現頻度が高い
- ・漫画であるため、当時の話し言葉に近いと考えられる¹⁰

という特徴があるため、教科書資料との比較対象になりうる。

試しに長谷川町子（1997）『長谷川町子全集 第1巻 サザエさん①』（朝日新聞社）
を調査してみた。この本は昭和21（1946）年3月から昭和23（1948）年6月に新聞掲
載された作品が収められている。

まず、姉の呼称を見ると、じではもっぱら「ねえさん¹¹」という語が現れるが、『サ
ザエさん』ではカツオ（サザエから見て弟）やワカメ（同じく妹）がサザエを呼ぶとき
の呼称はほぼ全て「ねーちゃん¹²」である。おそらくは『サザエさん』の用例の方が当
時の話し言葉を反映していると思われる。

また、父母への呼称を見ると、じではもっぱら「おとうさん」「おかあさん」である。
一方で、サザエ・カツオ・ワカメが父母である波平やフネを呼ぶときの呼称はじと同じ
く「おとうさん」「おかあさん」もあるが、サザエが呼ぶ場合、「パパ」「ママ¹³」という
形も少数ではあるが現れている。これも当時の若い女性が親を呼ぶ際の言い方を示して
いると思われる。

このように国語教科書の調査のみからでは見ることの出来ない事実が、『サザエさん』
を調査すると明らかになる可能性がある。

5. 今後の課題

以上、教科書資料に見られる親族呼称の変遷の一部と、そこに見られる論点を挙げた
が、今後の課題とすべき問題点も多い。

まず、εの資料については使用時期が1941年から1946年までであるにも拘わらず、
1946年に再編集されたヴァージョンのさらに復刻版を、現状、調査対象としている。
したがって、オリジナルに見られる文章（例えば軍国主義とみなされたものなど）が削
除された本である可能性が高い。そのため、当時の小学生が学ぶのに使った版を閲覧
し、再調査する必要がある。

次に現行制度下の教科書であるイーハであるが、閲覧できた資料の幅から、わずか3
種類のみにとどまっている。今回は光村図書の国語教科書を調査したが、他の出版社の

教科書も調査し、より綿密な変遷の過程を掴みたい。

これらの問題点を解消した上で、同時代の文学作品や4で挙げた『サザエさん』などの教科書以外の資料についても調査を行う必要がある。

以下の図はいずれも筑波大学中央図書館所蔵資料より。

傍線は引用者による。

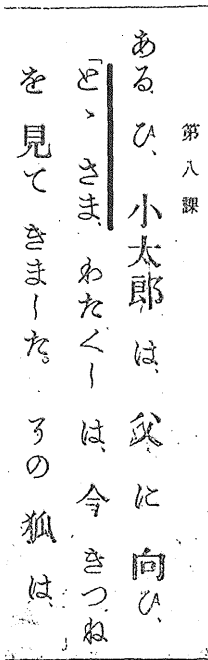


図1 C 巻1 10丁表



図2 α 巻2 p.1

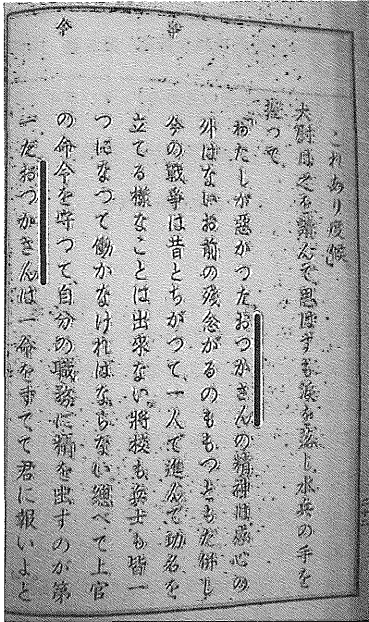


図3 β 卷9 p.22

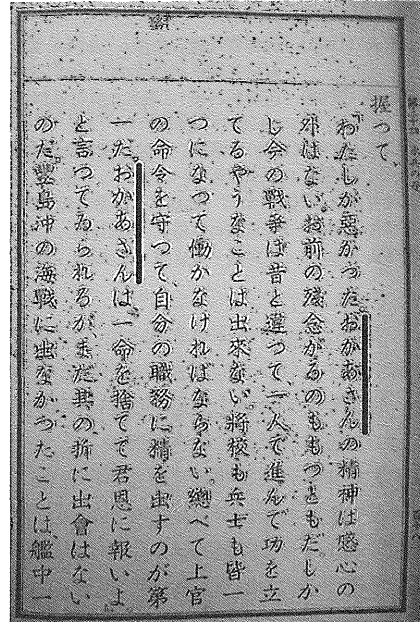


図4 γ 卷9 P.118

注

1. 使用時期は昭和16 (1941) 年から昭和21 (1946) 年までである。戦後になると軍国主義的な部分は墨塗りされて用いられた。
2. これらの時代区分は井上 (1958) および大田 (2006) による。
3. 以下のページから各資料を閲覧。
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylamedio/search/book.do?target=local&bibid=928335>
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylamedio/search/book.do?target=local&bibid=908222>
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylamedio/search/book.do?target=local&bibid=911550>
4. 文の語り手が親族に呼びかけている場合。
5. 大槻文彦 (2004) 『言海』 (ちくま学芸文庫) にて確認 この本は明治22 (1889) 年に刊行された『言海』の628刷 (昭和6 (1931) 年) を底本としている。
6. 旧仮名遣いの場合「おまへ」と表記される。
7. 印欧語の文法でいうところの呼格 (vocative) に相当。
8. 原文ママ。
9. 連載期間は昭和21 (1946) 年から昭和49 (1974) 年。
10. 「四コマ漫画の吹出し・添書きは、その時代の会話あるいは言葉の録音盤である。その時代に普通に使われていた言葉が記録されている (清水勲 (2009 : 左から14))」
11. 『こくご 四』 p. 82 など。
12. p.12 1コマ目他多数。
13. 『パパ』 p.16 4コマ目他、「ママ」 p.51 4コマ目他。

参考文献

- 井上敏夫 (1958) 「国語教科書の変遷」(全国大学国語教育学会 編『国語教育科学講座 第5巻 国語教材研究論』 明治図書 pp.9-78 所収)
- 大田勝司 (2006) 「国語教科書」(滋賀大学付属図書館 編『近代日本の教科書のあゆみ』 サンライズ出版 pp.22-29 所収)
- 国立国語研究所 (1989) 「解説」(『国定読本用語総覧4 第三期 あ〜て』 pp.(3)-(14) 所収)
- 清水勲 (2009) 『四コマ漫画——北斎から「萌え」まで』 岩波新書
- 帝都教育研究会 編 (1932) 「国語科」(『国定教科書 編纂趣意書集成 全』 教育書院 所収)
- 中村通夫 (1948) 『東京語の性格』 川田書房
- 水原明人 (1994) 『江戸語・東京語・標準語』 講談社現代新書

(たむら たかひろ 筑波大学)